教育実践研究　第24集（2014）　229－234

［生徒指導］

思いや考えをもち，かかわりながら高め合う子どもを育成する指導
－全校ソーシャルスキルトレーニングの取組を中心として－

会田　範夫*

1　問題の所在

文部科学省2011年の報告によると，いじめや不登校，暴力行為の認知・発生件数は，ここ数年，横ばいの状況である。各学校でこれらの生徒指導上の問題に対する取組が熱心に行われているにもかかわらず，減少に転じていないことに，深刻な状況が続いていると言える。小学校で起こった暴力行為の発生件数に占める生徒間暴力の割合に目を向けてみると，2010年は60.5％に対し，2011年は62.7％と増加している。また，加害児童に対する学校の対応において，「ルールの徹底や規範意識を醸成するための指導」のほかに，「被害者等に対する謝罪指導」「友人関係を改善するための指導」が，70.7％に上る。この数値から，児童が対人関係を上手く築けないために問題が起きているととらえている学校が多いことが読み取れる。河村（2007）は，現代の児童は「対人関係の体験学習が不足している」とし，「対人関係がうまくいかないのは，その人のもって生まれた気質によるものではなく，ソーシャルスキルという技術が未熟だから，その技術を学習すれば対人関係は向上する」と述べている。[1]そして，「仲間関係を円滑に進め，維持していくための能力（ソーシャルスキル）が注目されており，仲間関係においてトラブルを起こしやすい児童が適切な仲間とのやりとりを学ぶ社会的技能訓練（ソーシャルスキルトレーニング　以下，ＳＳＴ）が実践」[2]されている。

このＳＳＴの実践の多くは，学級集団が対象である。上越市立春日小学校では，2007年に学級やグループを対象にＳＳＴに取り組んでいた。しかし，「子どもが活用している共通のスキルが少ない，スキルを知っていても発揮しようとしない，スキルが確実に定着しない等」の課題から，2008年に全校規模でソーシャルスキル教育（以下，ＳＳＥ）に取り組んだ。その結果，学校内で同時期に共通のスキルを学習することで，校内にスキルを使っていこうとする雰囲気が高まり，スキルの定着を目指し，学校規模で取り組むことができたとして，その効果を実証している。[3]

当校の児童は，自分の思いや願いを感情のまま口に出したり，相手の立場に立った言動が上手くできなかったりするために，普段の生活の中で，友達と上手くかかわれない，手や足が出てしまう等の様子が見られた。また，学習面において，児童は思いや考えを自分なりにつくり上げているが，他とのかかわりが弱いために，つくり上げた考えを相手に伝え，友達の考えとの調整を図りながら，さらによりよいものへと高めていくことに課題があった。

このような児童に，全校ソーシャルスキルトレーニング（以下，全校ＳＳＴ）を取り入れ，人とのよりよいかかわりを身に付けた中で，自分たちの思いや考えをさらに高めていく力を向上させたい。そのために，かかわり合うための基本スキルの設定とその継続的な指導，より全校児童・全職員がスキルを共通理解する場の設定，体験を絡めてのスキル獲得とともに，より場面を焦点化したスキルも取り上げることを大切にした全校ＳＳＴを中心とする，当校の実態に合わせた生徒指導が必要であると考えた。

2　研究の目的

上越市立春日小学校で実践されたＳＳＥをもとに，全校ＳＳＴに取り組む。学んだスキルを学級や異年齢集団活動等で身に付け，学校生活全体を定着の場とする。そして，児童が身に付けた適切な対人関係能力をもとに，よりよいかかわり合いを築き，高め合える個や集団を育むことを目指す。そこで，本研究の目的を次のように設定した。

> よりよい人とのかかわり方を身に付け，高め合える個や集団を育てるため，全校ＳＳＴを中心とした生徒指導を実践し，その成果と課題を検証する。

＊ 柏崎市立半田小学校

3　研究の内容と方法

本研究は，アンケートや見取りをもとに児童の実態を明らかにする。そして，児童の伸ばしたい力を全職員で共有し，全校ＳＳＴを実施する。全校ＳＳＴは，上越市立春日小学校での取組を参考に，当校の実態に合わせたスキルや回数で実施する。学んだスキルは，学校の教育活動全体で身に付け，定着を図る。中でも，学校生活の大半を占めているのが教科の学習であり，「教科において生徒指導を充実させることは，生徒指導上の課題を解決することにとどまらず，児童生徒一人一人の学力向上にもつながるという意義」[4]があることから，授業をその中心に据え，学んだスキルの般化を図りながら，安心して自分の思いや考えを出し合いながら学びができるよう取り組んでいく。また，学級の人間関係の枠を超えたかかわりをもつことができる異年齢集団活動も重視する。そして，これらの取組を通して，よりよいかかわりができるようになったかどうかを，Ｑ－Ｕ調査やアンケートによって検証する。

⑴　対象　　全校児童１年生～６年生　　児童数：426人（2011年度），412人（2012年度）

⑵　実施期間　2011年９月～2013年３月

⑶　実践内容

①　児童の実態や保護者の願い，職員の見取りの把握と伸ばしたい力の確認

②　全校ＳＳＴの実施方法の決定と指導計画の作成

③　授業や縦割り班を中心とした異年齢集団活動における学んだスキルを生かす工夫

④　Ｑ－Ｕ調査，アンケートによる取組の検証

4　研究の実際

⑴　児童の実態と保護者の願い，教師の見取り

①　児童の実態

全校ＳＳＴを行う前に，全校児童を対象に「児童用社会的スキル尺度」[5]を用いて調査を試みた。その結果，「友達の意見に反対する時に，なぜ反対なのか理由を言う」「他の子に押されたり叩かれたりした時，怒らないで理由を聞く」「友達が意地悪をしたり，悪口を言ったりしてきても無視する」「自分の気持ちを素直に表す」「自分の考えをはっきり言う」「自分が何か困っている時に友達に相談する」等の項目で，「全然そうしない」「あまりそうしない」が30％を超えた。相手に自分の気持ちを伝えられない，相手が嫌なことをしてきたときの対応が上手くできない等，友達とのかかわり方が不十分であることが分かった。

②　保護者の願い

保護者にもアンケートを実施した。結果から，話を聞くことに対して不十分であるとみている保護者が多いことが分かった。また，「どのような『思いやりの姿』を期待するか」の問いに対し，「自分がされて嫌なこと，言われて嫌なことはしないでほしい」「相手の話をきちんと聞いてほしい」「優しい言葉・優しい口調で話してほしい」等の意見が聞かれた。

③　教師の見取り

校内研修でどのような児童であるか，ワークショップ形式でとらえ直してみた。人懐っこさ，明るさ，素直さ，元気のよさ等のよい面があるが，すぐに手を出してしまう，自己中心的であること，きついものの言い方をしてしまうこと，自己肯定感が低い等の実態を確認した。

④　児童の伸ばしたい力の共有

以上のことから，児童にとって大切なのは，「かかわり合い」であるととらえた。他とかかわり合う上で，相手の話を本気で温かく聞くことや自分の考えや思いが相手に分かるように優しく話ができることは，温かな人間関係，思いやる人間関係づくりに結び付くことから，かかわり合うための「聞き方」「話し方」の力を高めることが大切であることを全職員で共有した。

⑵　全校ＳＳＴの実践

全校児童に「聞き方」「話し方」の望ましい姿を意識付けるために，「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」と称して，児童に身に付けるべきスキルとして具体化した。そして，図１を特別教室を含む全教室に掲示した。全校で歩調を合わせるための全校ＳＳＴを実施し，その取組を生かしな

図１「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」のスキル

がら児童の学校生活の大半を占める日々の授業を中心に育てることとした。

① 全校ＳＳＴの実施方法

全校ＳＳＴは，上越市立春日小学校の方法を参考に，図２のような流れで行った。全校ＳＳＴに１単位時間を使うことはせず，朝会の時間に行い，名称を「思いやり朝会」とし，毎月第２火曜日に位置付けた。

ここでは，全校で教示とモデリングを行った。その後，教室に移動して，１時間目を全クラス一斉に道徳の時間と，リハーサルを行った。フィードバックは，１週間を強調週間として，「がんばりカード」に毎日自分の言動を記入し，振り返るようにした。般化は，フィードバックの１週間も含め，学校生活のあらゆる活動の中で全職員が同じ歩調で賞賛や注意の声がけをしたが，学校生活の時間の大半を占める授業を最も重視した。さらに，児童が学んだスキルをタイムリーに家庭でも意識して声がけをしてもらうことを目的に「思いやり通信」を発行し，思いやり朝会や一斉道徳の様子，「がんばりカード」の振り返りの内容を紹介した。

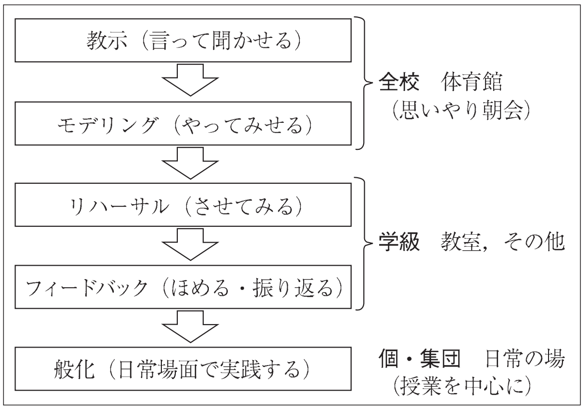


図２　全校ＳＳＴの流れ

② 全校ＳＳＴの実際

ア スキルの配列

2011年度は，「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」のスキルを身に付けることを基本とし，９月から１月までの４回を計画した。ターゲットスキルは，児童の実態や運動会等の行事，児童会による出店活動に合わせて取り上げた。2012年度は，「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」は新１年生がそのスキルを学ぶ場として，また，改めて大切であることを意識付けるために取り上げた。さらに，各学年で必要なスキルが違うということから，学年部で実施するＳＳＴを計画する等，前年度の成果と反省を生かすようにした。（表１）

表１　全校ＳＳＴ　スキルの配列

〈2011年度〉

	内　容
９月	第１回「あたたかい聞き方」 ・「思いやり朝会」について理解する。 ・あたたかい聞き方の大切さを理解し，そのスキルを身に付ける。
10月	第２回「やさしい話し方」 ・やさしい話し方の大切さを理解し，そのスキルを身に付ける。
12月	第３回「あいさつ」 ・あいさつのスキルを通して，よりよい人間関係を築く力を身に付ける。
１月	第４回「あたたかい言葉がけ」 ・あたたかい言葉がけのスキルを通して，よりよい人間関係を築く力を身に付ける。

〈2012年度〉

	内　容
４月	第１回「あたたかい聞き方・やさしい話し方～基本編～」 ・あたたかい聞き方の大切さを再確認し，そのスキルを使っていこうという意識を高める。
５月	第２回「あたたかい聞き方・やさしい話し方～音楽・体育編～」 ・音楽や体育での温かい言葉がけを確認し，使っていこうとする意欲を高める。
６月	第３回「あたたかい聞き方・やさしい話し方～話し合い活動編～」 ・話し合い活動における他者とのかかわり方を確認し，使っていこうとする意欲を高める。
11月	第４回「あったかメッセージ」 ・縦割り班活動でのかかわり方のスキルを確認し，実際の活動場面でスキルを意識し，発揮することができるようにする。
１月	第５回　各学年部で実施 ・低学年　雪遊びでの活動内容を決める話し合いを通して，自分の考えを伝えたり，肯定的に聞いたりできる。 ・中学年　あやまる，気遣う言葉かけのスキルを通して，よりよい人間関係を築く力を身に付ける。 ・高学年　江戸しぐさを通して，他の人に対して思いやりの心をもって行動することができる。

イ 思いやり朝会

全校ＳＳＴとなる思いやり朝会は，教示からモデリングまでを行う。担当がその都度シナリオを作成し，事前練習を経て，実際を迎える。教示では，パワーポイントを使い，視覚に訴えながら，ターゲットスキルの必要性を話した。モデリングは，よい見本と悪い見本を見せながら，児童に挙手をさせたり，違いを話したりする等，児童参加の場を作るようにした。

ウ 全校一斉道徳（リハーサル，フィードバック）

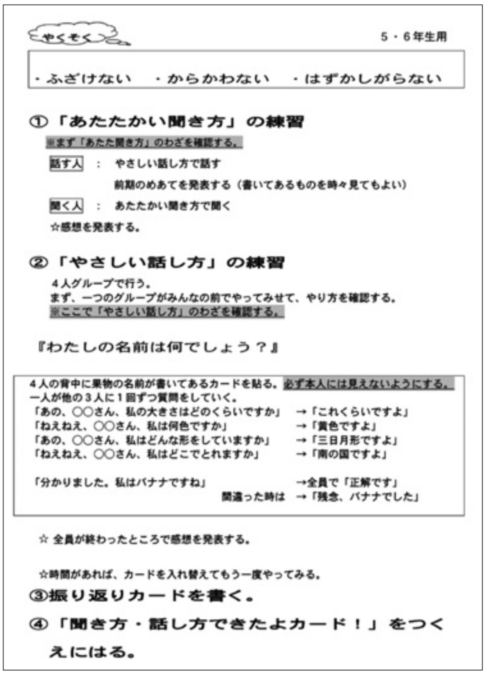
思いやり朝会でスキルを学んだあと，各教室で全校一斉にリハーサルを行う場を設定した。スキルの内容によって，全校が同じリハーサルを行ったり，上学年と下学年，または低・中・高学年に内容を分けたりした。さらに，リハーサルを行う際の約束として，「ふざけない」「からかわない」「恥ずかしがらない」の３点を全教室で徹底するようにした。リハーサルの内容は，児童がスキルを意識しながら，できるだけ楽しく取り組めるように工夫した。（資料１）リハーサル後にフィードバックとして，自分の取組を振り返りカードに記入し，般化につなげられるようにした。児童の振り返りからは，スキルを使うことの心地よさ，集団としてのまとまりを感じたり，スキルを使っていこうという前向きな気持ちになったりしたことが読み取れる。

〈2011年度１回目の振り返りから〉
- うなずくのを意識してやることは難しかったです。これからは意識ではなく当たり前にできるようになりたいです。（３年生）
- これからもこの聞き方をしようと思った。友達と仲良くする技をもっと勉強したい。（６年生）

〈2011年度４回目の振り返りから〉
- 今日やったことを学校やおうちでやりたいです。（１年生）
- 今までは，友達に「〇〇上手いねぇ」と言われて，返すときに照れてなんて言っていいか分からないときがよくあって「そんなことないよ」と言ってしまっていたけれど，これからは素直に「ありがとう」というようにしたいです。（５年生）

〈2012年度２回目の振り返りから〉
- みんなで応援するとなんだか心が一つになったみたいでとても気持ちがよくなった。（４年生）
- 失敗してもみんながすぐに励ましてくれるから「こわくない」と思いました。（６年生）

〈2012年度３回目振り返りから〉
- 優しい顔で話すのがあまりできないので，今度は挑戦したいです。（２年生）
- 言葉や言い方を変えるだけで相手の受け入れ方が違うということが分かりました。違うところでも使ってみたいです。（４年生）


やくそく　　5・6年生用

・ふざけない　・からかわない　・はずかしがらない

①「あたたかい聞き方」の練習

※まず「あたた聞き方」のわざを確認する。

話す人　：　やさしい話し方で話す
　　　　　　前期のめあてを発表する（書いてあるものを時々見てもよい）
聞く人　：　あたたかい聞き方で聞く

☆感想を発表する。

②「やさしい話し方」の練習

4人グループで行う。
まず、一つのグループがみんなの前でやってみせて、やり方を確認する。
※ここで「やさしい話し方」のわざを確認する。

『わたしの名前は何でしょう？』

4人の背中に果物の名前が書いてあるカードを貼る。必ず本人には見えないようにする。
一人が他の３人に１回ずつ質問をしていく。
「あの、〇〇さん、私の大きさはどのくらいですか」　→「これくらいですよ」
「ねえねえ、〇〇さん、私は何色ですか」　→「黄色ですよ」
「あの、〇〇さん、私はどんな形をしていますか」　→「三日月形ですよ」
「ねえねえ、〇〇さん、私はどこでとれますか」　→「南の国ですよ」

「分かりました。私はバナナですね」　→全員で「正解です」
間違った時は　→「残念、バナナでした」

☆ 全員が終わったところで感想を発表する。

☆時間があれば、カードを入れ替えてもう一度やってみる。

③振り返りカードを書く。

④「聞き方・話し方できたよカード！」をつくえにはる。

資料１　リハーサルの内容

フィードバック後１週間を強調週間として，帰りの会に自分の言動を振り返り，「がんばりカード」に記録するようにした。教師は一日の様々な活動の場面でスキルを取り上げ，意識的に指導することにした。さらに家庭においても，学校で学んだスキルを発揮した場面に声がけしてもらうことを目的に，「思いやり通信」という便りを配布し，より確かな定着を目指した。

⑶　教科での指導

全校ＳＳＴによって全児童が同じスキルを学んでいることから，学校の教育活動全体での指導が可能となった。中でも一日のほとんどを占める教科の学習の時間での定着を中心とした。全児童・全教師が共有するスキルであるために，担任だけでなく，級外の教師が授業を行う場合でも同じ指導ができる。授業では，「合いある授業」と称し，助け合う，話し合う，聞き合う，アイディアを出し合う，まねし合う等かかわり合う活動を意図的に授業に位置付けた。仲間から認められている安心感をもとに自分の思いや考えを伝え合い，学びを高める授業を展開し，授業研究を通して検証した。

①　実践１　２年生音楽科「音のたかさに気をつけてうたおう」

ア　主な手立て

「わらべうた」を題材に取り上げる。「わらべうた」自体が「遊び」であることから，「遊び」を中心に授業を構成する。遊ぶことで，児童同士の交流が深まり，共に学び合おうとする仲間意識が期待される。また，普段取り組んでいる「あたたかい聞き方」を「あたたかい聴き方　音楽バージョン」に置き換え，自分の作った音楽を安心して気持ちよく表現できる温かい雰囲気をつくる。さらに，よりよい音楽を作っていくために，創作意欲を喚起する具体的なゴールを明確化し，仲間と高め合いながらよりよいものをつくり上げていけるようにする。

イ　成果

〈あたたかい聴き方　音楽バージョン〉
①　していることをやめる。
②　演奏者の方を見る。
③　最後まで演奏を聴く。
④　リズムに乗ったり，体を揺らしたりして聴く。

全校ＳＳＴで学んだ「あたたかい聞き方」や「やさしい話し方」を普段から積み重ね，わらべうたで遊ぶ学習を通して，音楽的な要素や仕組みに気づき，普段かかわりの少ない友達と遊ぶことで交流が深まり，自分でつくったふしをグループ内でつなげる活動ができた。また，「確かめ合う」「考え合う」「認め合う」「気付き合う」等のかかわり合う姿がグループで活動しているときに見られ，「音楽発表会で演奏するわらべうたをつくろう」という具体的な目標設定ともかかわって，よりよいものをつくり上げていこうと意欲的で，高め合う学びを展開することができた。

②　実践２　４年生社会科「水はどこから」

ア　主な手立て

「あたたかい聞き方」や「やさしい話し方」のスキルを生かすために，共同学習の一つとしてジグソー法による調べ学習を取り入れる。調べる課題の役割分担を生活班内で行い，異なる生活班から同じ課題を調べる児童が集まり，専門

家チームを作る。このとき，全校ＳＳＴで学んだスキルを発揮して，教え合ったり，助け合ったりするなど，一人で調べるよりも効率よく，深まりのある調べ学習が展開される。さらに，専門家チームで調べたことを自分の生活班に持ち帰って他のメンバーに責任をもって伝える活動では，発表する側は「やさしい話し方」，聞く側は「あたたかい聞き方」のスキルを発揮しやすい場をつくることができる。また，毎時間振り返りの場を設定し，学習内容の整理だけでなく，友達とのかかわりについても振り返り，フィードバックの場としたい。

イ　成果

ジグソー法を用いた調べ学習を展開することで，友達とのかかわりが必然的となり，「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」のスキルを活用する場を多く設定することができた。繰り返しスキルを使うことで，自然に賞賛し合う姿を見取ることができたり，教え合い，助け合いながら調べたことにより，充実した内容を伝えることができたという充実感を味わわせたりすることができた。単にスキルの定着だけでなく，自信をもって学習を進めることや自己存在感を高めることができた。

⑷　異年齢集団活動

日常的に触れ合う学級集団の人間関係を越えた広いかかわりの中でも，全校ＳＳＴで学んだスキルを発揮できる場を増やすことが効果的と考えた。これまでも，体力テストを縦割り班ごとに取り組むという独自の方法で行っていたが，その他にも学校行事や児童会行事において見直すべき活動を焦点化し，縦割り班を中心とした交流の機会を増やし，つながりを強くする活動を展開した。

学校行事では，運動会において異年齢集団での活動を増やした。応援席と開閉会式の並びをこれまでの学年別から縦割り班ごとの列に構成した。また，作戦をグループごとに考え，実際のレースでは高学年の指示のもと，全員で声を掛け合わなければならないような縦割り班での種目を工夫した。さらに，音楽発表会では，あたたかい聞き方で他学年の発表を聞くことを土台にして，お互いの発表を褒め合う「音楽発表会なう」に取り組んだ。「自分たちの発表を聞いている他学年はどう評価したのか」は，演奏した側にとって気になるところである。他学年から褒められたことで，一人一人が演奏の中での役割を遂行したという満足感を得ることができた。

児童会行事では，その最大の行事であり，児童も楽しみにしている「松の実フェスティバル」の見直しを図った。これまでのクラス単位で出店を行っていたものを，縦割り班で出店する形とした。６年生を中心にどのような店にするか，担当は誰にするか等の計画・準備を進め，当日の運営，出店回りを楽しんだ。また，準備の段階における振り返りとして，仲間の頑張りや手伝ってもらったこと，助けてもらったこと等を付箋紙に書いて掲示する「松の実ツイッター」にも取り組んだ。はじめは振り返りに時間がかかる児童もいたが，各縦割り班のツイッターを掲示することで書き方を知り，振り返りのまとめる時間が短縮されていった。さらに，掲示してあるツイッターを見ることによって，仲間のどんな行動や発言に注目すればよいのかの視点が分かり，もっと仲間のことを知ろうとする姿勢が見られた。この振り返りの取組が，次の活動において協力し合う，助け合う行動につながった。

5　結果と考察

⑴　児童のアンケートから

本実践の土台となる「あたたかい聞き方」「やさしい話し方」への児童の評価は，図３のようになった。研究の実践により，わずかではあるが向上がみられた。

聞き方については，約95％の児童が「できた」と振り返り，「できなかった」とする児童は，５％まで減少した。それに対し，発言面では，できたとする児童は約55％にとどまった。友達の意見を受け入れる雰囲気は醸成されているが，自分の考えに自信がない児童が多いということである。授業の中でかかわり合う場面を積極的に設定するだけでなく，課題や発問を一層考慮し，授業を展開する必要があった。

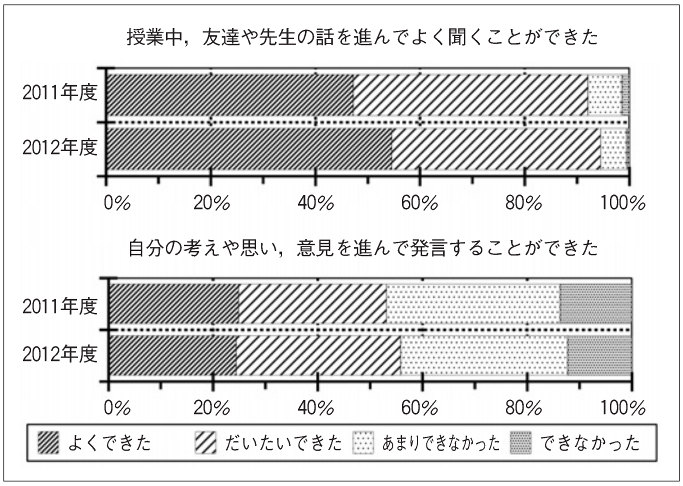


図３　全校児童による学習アンケート

⑵　Ｑ－Ｕ調査から

全校ＳＳＴや授業を中心とした般化，異学年集団における取組によるＱ－Ｕ調査の結果は，図４・図５のようになった。図４は，学級をスタートさせてから３か月経過した時点での比較であるが，学級生活満足群が11.3％向上し，人数

にして40人以上が新たに学級に居心地のよさ，不適応やトラブルがなくなったと感じている。さらに図５では，全校で同一歩調の取組をしながら，各クラスでかかわりのある授業を意図的に展開する取組を継続していった結果，約７割の児童が学級の生活・活動に満足し，意欲的に取り組めている。かかわり合い，高め合う活動の中で，「できた」「分かった」という充実感と自分の思いや考えが生かされ，高めることができたといえる。

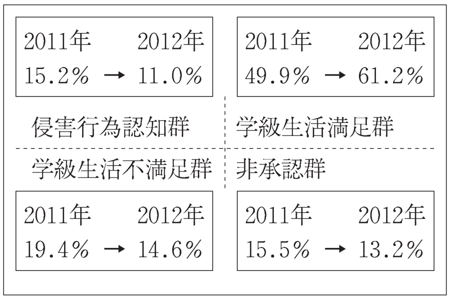


図４　７月のＱ－Ｕ調査の結果（全校児童）

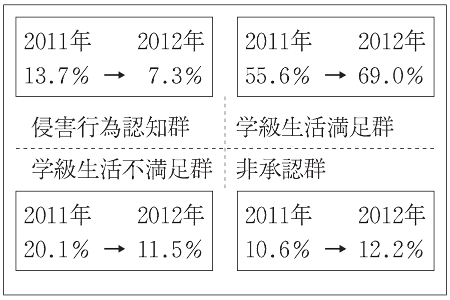


図５　12月のＱ－Ｕ調査の結果（全校児童）

⑶　保護者のアンケートから

保護者に対して，自分の子どもに対するアンケートを６月に行った。図６のようにかかわりを高める取組を積み重ねることにより，すべての項目で前年度を上回った。保護者の目から見ても，家庭内や学校外での友達とのかかわりが向上してきたと実感していることが言える。

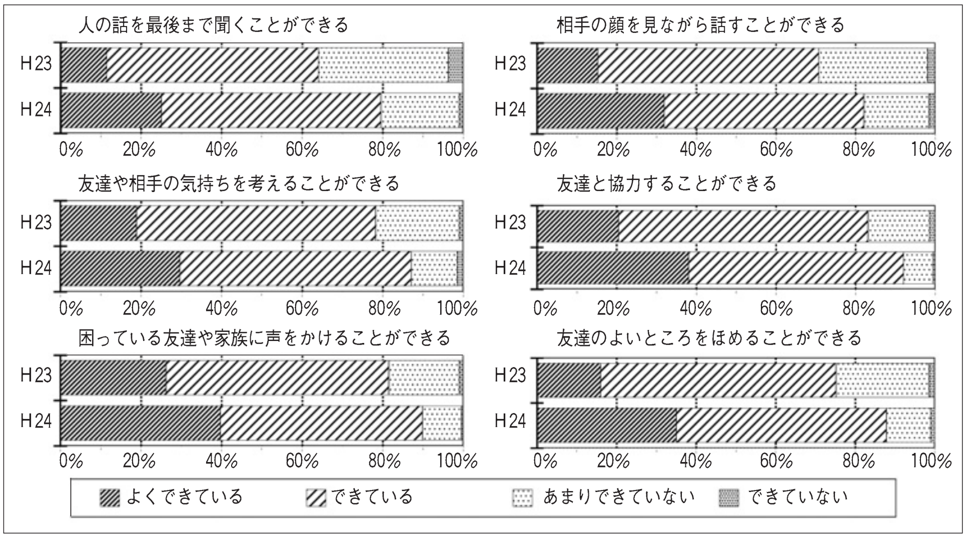


図６　保護者のアンケート結果

６　成果と課題

「聞き方」と「話し方」のスキル獲得を基本とし，そのスキルを学級集団単位ではなく，全校体制で身に付けさせ，学校生活の大半を占める授業や異年齢集団活動等の場でかかわり合う力を高めようという取組は，本実践から効果的であったと言える。また，それらのスキルをもとに，かかわり合う力を高めるための全校ＳＳＴを継続していったことにより，我慢したり，周りの助けを借りたりしながらも，児童は自分の居場所を確保し，仲間とのよりよい関係を築くことができた。実際，自分の過失によるけがや相手がいるけが，友達から危害を加えられたけがで保健室へ来室した児童が2011年度は293人いたのに対して，2012年度は195人と減少しており，これも落ち着いて行動できたり，友達とのかかわりがよくなったりしているためにトラブルが減少した表れと考えられる。また，数値には表れないが，全校朝会での整列も短時間でできるようになり，話を聞く態度や姿勢も向上し，児童全体の雰囲気もすがすがしさが感じられる。

授業中の児童の様子から，小グループでは自分の考えやアイディアを出し合って高め合おうとしており，「話し方」の結果からも多少の向上は見られる。しかし，大きな集団になると，自分の思いや考えを積極的に表現できない児童がまだ多く，今後，学力向上と合わせて，課題提示や発問，思いや考えをつなぐ手立て等について，本実践を土台に取組を進めていく必要がある。

〈引用文献〉

１）河村茂雄・品田笑子・藤村一夫　『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル　小学校高学年』図書文化社，2007年，18p
２）文部科学省　『生徒指導提要』，2010年，50p
３）新潟県上越市立春日小学校　『心と言葉で伝え愛－考えや思いを伝え，かかわり合う子どもの育成』，2008年
４）文部科学省　『生徒指導提要』，2010年，23p
５）佐藤正二・相川充　『実践！ソーシャルスキル教育小学校編』図書文化社，2005年，127pをもとに作成